大丈夫よ！お母さん！

教育コーディネーター　中西美沙子

（今回のテーマ）

思い出が育むもの

春の光が、縁側で踊っています。芽吹いた木々が、柔らかな風にゆれているからです。その光に手をかざして、ちいさな孫が見ています。どこかで見た光景です。カエデの若葉のような手が、光に染まります。

子どもは、どんなことにも興味を示します。初めて触れる世界が、ふしぎでならないように。

子育てをしていた頃を思い出しました。母親になった娘も、光に手をかざして、ふしぎなものを見るようにしています。もしかしたら、私も母の膝の上で、そのようなことをしていたのかも知れません。

すべてが光で輝いている時があります。子どもが歩き始めるころ。言葉を少し話せるようになった時。母親にとっては、とてもいそがしい時期ですね。かたわらにいないと子どもは何をするか分りません。でも、そのいそがしさに目を奪われない過ごし方があります。子どもは、大人のような言葉を持ちません。顔の表情や体の動きで、感情を表します。

「子育ての思い出は？」と問われると、私は日々の暮らしの中にある平凡なことをあげます。思い出は、七五三や誕生日など、大きな出来事だけにあるのではありません。子どもが初めて知る世界への関心を、見つめることでも刻まれます。

子育てに疲れたという母親の問題がニュースになったりします。なぜ母親は、ストレスを抱え込んでしまうのでしょう。「育てること」は、自然な感覚の対処でも、充分できるのに。それはたぶん、誰かの子どもと比較したり、子育て情報の多さに振り回されたりするからでしょう。

「こうすれば良い子に育つ」。「習い事は早いうちから」。「これを食べさせると頭が良くなる」。中には「頭の良い子に育つ住宅」なるものまで。このような情報は、すべて外からやってきたものです。大切なのは、親が家の中ですべきこと、ですね。「何かをしないと取り残される」。このような焦りを持つと、際限のないストレスがたまります。

子どもの表情や動きを見ていると、「かけがえのない時」を感じます。その時にしか生まれないものがたくさんあります。ご飯を食べる仕草や泣いた顔にも、心が和みますね。そこには、「見守ること」が作り出す、親子だけの世界があります。私たちはいそがしさの中で、出来事の表面だけに心が奪われがちです。

「子育て大変だったけど、また育ててみたい」。このように語る母親はきっと「見守る」楽しさを知った方でしょう。

思い出は、心に記憶として残ります。写真やビデオなどでも。たった1枚の写真が、親子の間にあった思いや、その時の匂い、音まで残すことを、私たちは知っています。

子どもを注意深く見守ることは、親と子どもの心に言葉で表現できないものを残すこと。それは、「ともに生きている」という実感です。この感覚があって、子どもは大きく成長するのでしょう。大人の世界が不安に満ちたものであっても、それを乗り越える力は、大きく母親に抱かれていた感覚です。

一歳になった孫に、歯が生えました。何でもよく食べます。食べているその子の表情には、「生きること」への意欲が、そのまま映っています。その子の顔に、私たち家族の新たな時の出発と繋がりが、重なって見えるのです。

Profile

教育コーディネーター

中西美沙子

執筆・講演活動のかたわら、様々な部門の文化事業を展開する「（株）クレアシオン」の代表。文章教室「スコーレ」画廊「キューブ　ブルー」「建築プロデュースすまい」「食彩いわさか」「ときわ薬局」など。文章教室は書き方を教えるだけではなく、生き方や考える視野を学ぶところです。

問 tel 053-456-3770

中西美沙子　検索

ピアニシモでね

中西美沙子 著

著書の「ピアニシモでね」（東京書籍）は、中日新聞に連載された人気コラム「つかまえて！こころ」をまとめたもの。同著には、親子の問題もいろいろ描かれています。（税込1,500円）

※お求めは浜松市内の谷島屋で。